

トピックス

いわき産農作物 安全確認 モニタリング実施

いわき市農林水産部は、この度の東京電力(株)福島第一原子力発電所の事故により、甚大な被害をもたらした本市農林水産業に対し、その安全・安心を立証し、消費者の信頼回復を図るため、福島県が実施している農林水産のモニタリング検査に併せ、独自に本市農産物の安全確認モニタリングを行うため、検査機器を導入し、実施することになりました。



▲ドイツ製ガンマー線スペクトロメーターLB2045

検査は、JA系統出荷主要農産品目を対象に、出荷前の安全確認モニタリング及び安全継続確認モニタリングを行うこととしております。

また、いわき市全体では、原子力発電所事故の様々な問題に対応するため、高性能の検査機器であるゲルマニウム半導体検出器4台の導入を予定しており、市民の皆様の安全・安心の確保を図ることとしております。

これらの取組みにより、「がんばっぺいわき」の実現に向け頑張りましょう。



ソルガム栽培で 農地の再生を目指す

皆さん「ソルガム」という植物の名前を聞いたことはありますか？一つの穂に3,000程の小さな穂をつける、高さ3メートルほどのイネ科の植物で、日本では「ミロコシ」と呼ばれており、飼料用作物として栽培されています。中国で広く栽培している「高粱」もその一種であり、食用としても親しまれている植物です。刈り取ったソルガムはバイオエタノールへと転換することができ、地球温暖化の進行を防ぐ自然エネルギー作物としても期待されています。

また、ソルガムは、土壌における有害な重金属の浄化や除塩にも効果があると言われていることから、放射性物質吸収効果の可能性にも着目した、泉町の鈴木(株)さん(55)は、今年5月に東京の仕事を辞めて故郷のいわき市へと戻り、農地再生とバイオ燃料生産を併せたソルガムの栽培を始めました。ソルガムの種子は、沖縄の会社で土壌浄化とバイオエタノール生産の研究を進め、最先



端のソルガム品種開発に取り組んでいる友人から分けてもらい、いわきでの栽培適地・適種を確かめるため、6月上旬に泉町の畑3箇所、豊間町内の塩害田、山間の水田の計5箇所に、100種類以上のソルガムを試植しました。8月に入ると、心配されていた塩害田でも約4メートルのソルガムが育ち、一部では収穫できるまでに成長しました。収穫したソルガムは、連綿している大学に持ち込み、放射性物質・植分の吸収量等について測定した後、切り刻んで圧縮をかけて分離し、エタノールを抽出します。エタノール側に移行した放射性物質は、ゼオライト膜によって分離除去ができるため、今回刈り取ったソルガムもバイオ燃料の原料として活用できるそうです。

鈴木さんに今後の目標を伺うと、まずは農地の浄化と再生ですね。いずれは自然エネルギー作物を定着させ、いわき市を農村再生モデルの最先端の町にしていきたいです。」と笑顔で答えてくれました。

今後は農業生産法人としても活動したいと考えている鈴木さん。いわき市の復興と、農業の再生に向けて奮闘する鈴木さんのご活躍を、大いに期待したいと思います。

また、休耕田や荒廃した田畑での栽培も可能となれば、年々広がりが続く耕作放棄地の解消や、転作田での新しい飼料用作物として期待ができます。

搾り粕の処理については、専用機械の導入等が大きな課題となっておりますが、今回の栽培により、ソルガムに除染・除塩効果が認められれば、原子力発電所事故により汚染された農地の再生や、津波の被害に遭った田畑の復興への大きな兆しとなるでしょう。



▲鈴木さんの背丈の2倍以上に育ったソルガム

編集後記

3月11日に発生した東日本大震災により被災された皆様には、心より御見舞い申し上げます。

あの未曾有の大震災からもう半年が過ぎました。津波や地震で住居を失った方や、海苔や地割れによって生活基盤である農地を失った方も大勢います。放射能汚染問題も未だ収束していません。毎日が不安の連続でした。

原子力発電所事故によって引き起こされた風評被害も深刻となっております。私達農業者はもちろん、消費者の皆さんにとっても大きな問題となっております。市では、風評被害防止に向けて、いわきの農作物に関する様々な情報を分かりやすくお届けする「いわき農作物見える化プロジェクト」を開始しました。四高町長友の水田に農業者約1,000人が集まり、プロジェクトの一環であるCM撮影が行われ、私たち農業委員も参加しました。CMは10月1日から首都圏で放送されます。

私たちの風評被害に立ち向かう姿を強い思いが、消費者の万々へ届くことを祈っております。

編集委員
二戸 進 渡邊 一 堀
遠藤 靖 遠藤 丁 春 塩野 樹太郎